

1989年 6月 9日(金)～ 7月19日(水)

(6月の寄贈品コーナー)

6月9日～7月30日

学童疎開

学年 学校名	3年	4年	5年	6年	計	備 考
田島国民学校	50	55	40	44	189	10ヵ所に分宿
日吉国民学校	一次181、二次177、				358	10ヵ所に分宿
川崎国民学校	86	77	104	116	383	10ヵ所に分宿
新町国民学校	40	40	50	50	180	9ヵ所に分宿
学童疎開児童数					1110	神田 旭 金田 岡崎 金目 豊田 城島

緒戦の勢いも東の間、米軍による日本本土空襲が時間の問題となるにおよんで、大都市の学童の集団疎開が実施されました。神奈川県では、川崎、横浜、横須賀の三市で実施されることになり、昭和19年8月旭・金田・岡崎・神田・豊田・城島の農村地帯に、川崎市の国民学校の児童(3年生から6年生まで)1,117名が疎開しました。

そのうち、神田村に疎開した学校は、川崎市立田島国民学校の児童、224名でした。これらの児童は、神田国民学校、真芳寺など6か寺、青年会館3か所等々に、8～40名のわりに分宿し疎開生活を始めました。

大神の真芳寺には、40名の児童が杉山智男先生に引率され生活しますが、たまたま、杉山智男先生は、市内公所出身の先生でした。

杉山先生のお話しによれば、疎開先での日課は、夏と冬、低学年と高学年では多少異ってはいましたが、夏は起床六時半、布団をたたみ、簡単に掃除をし、洗面。七時半に点呼をし直ちに食事、八時半から授業。午後は自由時間、七時夕食。八時からは30分の自習が行われ、九時就寝という毎日であったといえます。授業は、戦争中でもあり満足なものではなく、読み・書き・計算が主であったといえます。さらに、空襲が激しくなると、複式授業や、本堂で、庭の青空教室での授業も多くなり、正規の時間割通りの授業もできなくなって

いきました。

授業のほか、農作業・防空壕の材木伐採の仕事等々児童にとり苦しい仕事もあり、十分な食事にも事欠き、おまけに風呂が各宿舎ともになかったので、農家のもらい風呂だけでは不十分で、しらみや皮膚病にさいなまれることも多かったのです。

午後、遊びに疲れ、夕食までの間のひと時、親元を離れた辛い生活が、児童をいっきに寂しさのどん底へと落とし、一人が泣くと全員がつられ泣くという日々が続きました。

しかし、苦しい事、寂しい事、辛い事ばかりでもなく、夏は、相模川での終日水泳、釣り、螢狩り、盆踊り等結構楽しい生活もあったようです。

杉山先生は、児童にそうした疎開児童の疎開先での生活の様子を絵に描き、離れて生活する親元へ送ることを奨励します。当時は、物資不足から写真を取ることもなく、疎開先での様子を知らせる唯一の手段が絵でした。テーマは何んでも良く、昼寝、もらい風呂、材木伐採、雑木拾い、農作業、夜の自習、蚊帳の中、青空教室、食事、盆踊り、螢狩り、木登り、かえぼり、本堂の掃除などなどあらゆる生活の様子がテーマとなりました。

そうした絵の何枚かが杉山先生の手本にも残りました。6月の寄贈品コーナーは、そうした絵の中から、選りすぐった作品を展示したいと考えています。どうぞご期待ください。(土井)